

家庭における性教育に関する一考察

—小・中学生の性の受容と家族とのかかわり—

天野 敦子 (養護教育教室)
伊東 純子 (三好町立三好中学校)
大石 昌男 (三好町立三好中学校)
大河内 治 (三好町立中部小学校)

A Study on Sexuality Education Activities

— The Identification of Male and Female of Children, and Their Parents' Participation —

Atsuko AMANO (Department of Yogo Science)
Junko ITO (Miyoshi Junior High School)
Masao OISI (Miyoshi Junior High School)
Osamu OKOCHI (Miyoshi Chubu Elementary School)

1 はじめに

現在の学校における性教育を概観すると、科学的な知識と同時に人間の感動を呼び起こし、生き方を学ばせるものでなければならないと言う共通認識が徐々に浸透しつつあるように思われる。それとともに、性教育は個人差が大きいため家庭において両親から子どもの年齢に応じたこまやかな指導がなされることも求められだしている。このことは、ブラゼルトン¹⁾が親子の情熱的な「相互作用」に子育てのエッセンスがあると指摘していることや、小此木²⁾が、親子がお互いに相手をどう思っているかは、親子関係を考えるうえで非常に重要な意味をもっていると述べていることとも通じるものである。また齊藤³⁾は、親から愛されない子どもは、自信がなく、その自信のなさが無力感にむすびついたり、攻撃的行動となってあらわれたりすると述べているが、親の愛や親子の絆の強さは、子どもが自立していくために重要な役割を果たすと考えられる。

親子の関係は、いのちを得た時点から生まれ、意思を交わしあう相互関係は、子どもがこの世に誕生した日から始まる。それは子どもにとっても自分の人生の出発点として意義深い事である。社会情勢の変化に伴い離婚が容易になるにつれて、母子家庭や父子家庭の子どもたちが増加している現在、伝統的な家族関係を中心とした性教育のみではすまされない状況がでてきている。しかし、現実から逃げるのではなく、このような時にこそ、この世にいのちを得た時点の情報を大事にして教育の中で生かしていくことが大切となろう。そこで、私たちは子どもたちの誕生に焦点をあて、家

族の情報がどのように作用しているか研究することにした。

ここでは児童・生徒および保護者に対して三好町の学校保健部会が行った性に関する意識調査をもとに、自分の誕生に関する家族からの情報の有無が、児童・生徒における「性認識」や「精通・初経の受けとめ方」にどのように関連しているかを検討したので報告する。

2 研究対象と方法

- (1) 調査時期
1991年7月1日～7月14日
- (2) 調査対象
対象は表1に示すように、愛知県三好町の小学校6校と中学校3校、計9校の児童・生徒、及び保護者である。
- (3) 調査方法
担任教師を通じて質問紙によるアンケート調査を実施した。回収した調査用紙は、マークシートに転記した後、愛知県教育センターにデータ処理を依頼した。
- (4) 調査内容
児童・生徒……家庭概況、自分の性認識、男性像と女性像、異性とのかかわり、精通・初経、性指導の実際、家庭での性教育、性に関する不安や悩み、性について知りたいこと等
保護者……家族構成、しつけ、家事、性に関する質問、家庭で指導すべき内容・学校で指導すべき内容等
本稿では上記の調査項目のうち①自分の誕生に関する家族からの情報、②自分の性の受けとめ方、③

精通・初経を迎えた時の気持ち, ④家庭での性に関する質問について検討した。

(5) 統計処理にはカイ自乗検定を用いた。

表1 調査対象

	児童・生徒				人数 (%)	
	男 子		女 子			
	調査対象	有効回答 (回収率)	調査対象	有効回答 (回収率)		
小学校下学年	552	544 (98.6)	545	538 (98.7)		
小学校上学年	644	641 (99.5)	593	590 (99.5)		
中 学 生	649	642 (98.9)	606	598 (98.7)		

	保護者				人数 (%)	
	父 親		母 親			
	調査対象	有効回答 (回収率)	調査対象	有効回答 (回収率)		
小 学 校	1,645	1,636 (99.5)	1,626	1,579 (97.1)		
中 学 校	1,007	1,003 (99.6)	1,059	1,050 (99.2)		

3 調査結果および考察

(1) 自分の誕生に関する家族からの情報

家族からの情報をどの程度記憶しているかについて「あなたが、お母さんのお腹の中にいた時や生まれる時の様子を、家族から聞いたことがありますか」と質問した結果を図1に示した。

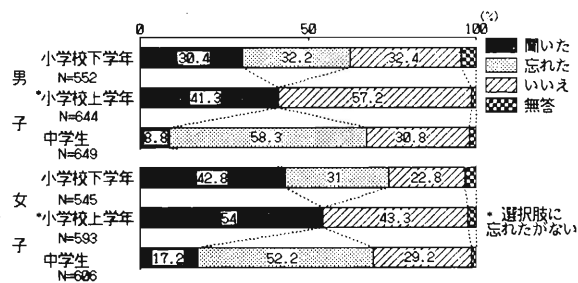


図1 自分の誕生に関する家族からの情報

小学校上学年(4~6年)に「忘れた」がないのは、問いの選択肢に「忘れた」を入れなかったためである。従ってここでは「聞いた」と答えた者について検討することにした。小学校下学年(1~3年), 小学校上学年, 中学生別にみると, 「聞いた」と答えたのは, 男子では30.4%, 41.3%, 8.8%, 女子では42.8%, 54.0%, 17.2%であった。学年別にみると小学校下学年に比べ上学年の方が, 男女とも10%ほど高率であったが, 中学生になると極端に減少していた。性別ではいずれの学年においても自分の誕生について情報を得ている者(以下情報あり群とする)は, 女子の方が10%ほど高率であった。

D. モリス⁴⁾は, 赤ん坊の写真を見た際の瞳孔拡大の実験結果から, 男性は子どものある者のみが瞳孔の強い拡大を示したが, 女性は結婚の有無, 子どもの有

無の別なく瞳孔を拡大させた。このことは男性に比較して女性は結婚前から母親的な準備ができていたと述べている。本研究の結果で女子に情報を得ている者が多かったのは, 子どもの時でも赤ん坊の誕生について女子は関心が強いのではないと思われる。また, 中学生に「聞いた」と回答した者が減少していたのは, 学習量の増加や興味関心の変化などにより記憶が薄れたり, 思春期特有の心理的要因が影響し意識して回答を避けたりしていることも考えられるが, 今回の調査ではその理由を明らかにできなかった。

(2) 自分の性の受けとめ方

自分の性をどう受けとめているかは, 生後の環境や育ち方などが影響しているといわれている。「自分は, 男・女に生まれてきてよかったと思いますか」と質問した結果を図2に示した。

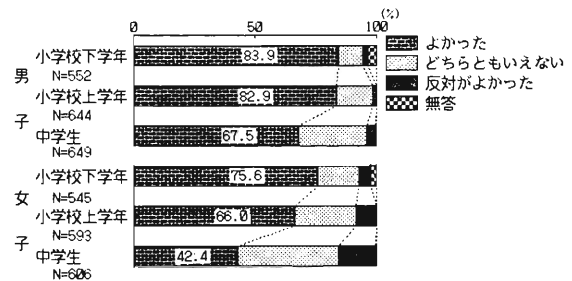


図2 小中学生別にみた性の受けとめ方

「よかった」と回答した者を性別で比較してみると, 男子では小学校の下学年, 上学年の別なく80%以上が「よかった」と回答しているのに反して, 中学生では67.5%と減少していた。女子は, 小学校下学年75.6%, 小学校上学年 66.0%, 中学生42.4%と段階的に減少傾向がみられた。中学生の男女を比較すると男子では「よかった」と回答している者が, 女子より20%程多く, 性差による違いがみられた。

「反対ならばよかった」と回答した男子は小学校下学年2.2%, 小学校上学年1.9%, 中学生3.7%で, 女子は小学校下学年5.0%, 上学年8.4%, 中学生15.4%であった。男女別にみると, 男子は小学生ではほとんど変化がみられず, 中学生になって多少増加がみられた程度であるが, 女子は学年が進むにつれて自分の性を受け入れられない者が増加していた。「反対ならばよかった」と回答している者は, どの年代をとっても女子の方が多く中学生では顕著であった。

東京都性教育研究会⁵⁾による1991年の同様の調査結果では, 「よかった」と答えた者を男女別に小学校高学年, 中学生の順にみると男子は86.4%, 71.8%, 女子は58.9%, 46.2%であった。「反対ならばよかった」と回答した者を男女別に小学校高学年, 中学生の順にみると男子は0.8%, 2.7%, 女子は18.1%, 15.8%であ

た。これらの結果について東京都と三好町を比べてみると、性の認識に関しては地域的な差はみられず、またどちらも自分の性を肯定する者は男子に比べて女子は低く、それは中学生でより顕著となっていた。このように女子に低い傾向がみられるのは、月経の手当てに負担を感じていることも一因であろうが、大人の性別役割行動と密接な関係があるように思われる。

例えば企業に勤める女性は、これまでは結婚すると退職することが多く、仕事を続けていく者は限られていた。しかし、最近の女性の結婚観は変わり、自分の生き方についての考えを持ち、結婚をしても仕事を続ける者が増加してきている。このように女性の社会進出も進んできているが、まだ十分とはいえない。男女ともに自分の力を発揮できる社会を目指した教育が今後も望まれると武川⁶⁾は述べている。一方、水上ら⁷⁾の研究によると、娘の母親への愛着が高い群は、「親や家庭の受けとめ方」や「自己受容」の肯定率が有意に高いことを明らかにしている。このことから家庭においても、民主的な夫婦関係や親子の絆を大切にしていけることが重要である。

(3) 家族からの誕生に関する情報の有無と性の受けとめ方

実際の子どもたちは、学校から帰った後で、おけいこごとやスポーツクラブさらに学習塾などに追われた生活をしているものが多く、遊び方も屋外の集団遊びからひとりでファミコンに熱中するというように変わってきており、子ども同士の人間関係が希薄になってきている。また、家庭環境をみても両親が忙しく、親子で接する時間が以前より少なくなったため、親子の会話がすくなくなり信頼関係もゆらいできているといわれている。

家族から自分の誕生について聞いたことがあると回答した者を「情報あり群」、家族から聞いていない者を「情報なし群」とし、自分の性を「よかった」と回答する者の結果を示したものが表2である。

小学校下学年、小学校上学年、中学生それぞれに「情報あり群」と「情報なし群」の差をみると男子(+5.5%)、(+3.0%)、(+8.7%)、女子(+0.6%)、(+7.1%)、(+7.8%)となっており「情報あり群」の方が自分の性を受け入れている者が多い傾向がみられた。これらの結果は、望ましい親子関係を持つための家庭環境や伝達方法を考える必要性があることを示している。

誕生日は家庭における性教育の場として非常に有効であると考えられている。

武川⁸⁾は、プレゼントを送るだけでなく、心に残る日とするために、誕生日の喜びやその日の情景など内容を違えながら語ったり、文章にしたためたものを手渡すなどの演出で親心を伝えたいと述べている。一方、

八ツ塚⁹⁾も「誕生日は、お前がおめでとうを言ってもらう日ではない。……………お前を命がけで生んでくれたお母さんに感謝する日だ。」という男児の父親の例を紹介して誕生日教育をすすめている。

表2 家族の情報の有無と自分の性を「よかった」とする者の割合

		人数(%)			
		情報あり群		情報なし群	
男	小学校下学年	N=168	149(88.7)	N=179	149(83.2)
	小学校上学年	N=266	225(84.6)	N=369	301(81.6)
	中学生	N=57	43(75.4)	N=378	252(66.7)
女	小学校下学年	N=234	179(76.5)	N=170	129(75.9)
	小学校上学年	N=323	223(69.0)	N=260	161(61.9)
	中学生	N=104	53(51.0)	N=317	137(43.2)

(4) 家族からの誕生に関する情報の有無と精通・初経を迎えた時の気持ち

表3は、情報の有無と精通・初経を迎えた時の気持ちとの関係を示したものである。

精通・初経を迎えた時「うれしかった」と回答している者を「情報あり群」と「情報なし群」との両群に分けて比較すると、小学校上学年男子では14.8%、2.4%であり、中学生男子では11.1%、3.7%であった。また、小学校上学年女子では6.1%、3.1%であり、中学生女子では7.6%、4.5%であった。「情報あり群」は、「情報なし群」にくらべ精通・初経を迎えた時の気持ちを「うれしかった」と答えた者がやや多く、逆に「いやだった」と答えた者は少ない傾向がみられた。

子どもたちは、思春期を迎え精通・初経の出現による身体的変化に戸惑ったり、自我の目覚めとともに自分の存在とは何だろうと不安になったり、激しく揺れ動いている。松本ら¹⁰⁾は、最近の月経教育を受けた10代前半の者に月経に対して否定的な印象を持つ者が多いことは、月経教育のあり方に重大な問題を投げかけていると憂慮している。また、川瀬¹¹⁾は、初経を迎えた女子に対して母親が否定的なことばをかけた場合と、肯定的に話した場合の子どもの月経の受けとめ方を比較してみると、子どもたちの受けとめ方は全く違ってくることを述べている。さらに、平林¹²⁾は、二次性徴の変化を肯定的に受けとめる者のほうがそうでない者よりも、自分自身に誇りをもつことができるので、彼らの自己形成にとって好ましいと述べている。

今回の調査結果では、精通・初経を肯定的に受けとめている者には、自分の誕生時の話を家族から聞いている者が多かった。それらの家庭では性に関する話に限らず、親子の対話があり、話題も広範囲にわたっていると思われる。

精通・初経を迎えることを、中学生たちがどう受けとめるかは、特に異性への態度や、自分自身に対する自信という点に大きな影響を与えるであろう。小学校

表3 家族からの情報の有無と精通・初経を迎えた時の気持ち

				うれしかった	何とも思わない	びっくりした	心配だった	いやだった
男子	小学校上学年	情報あり群 N = 27	4(14.8)	12(44.5)	6(22.2)	5(18.5)	0(0)	
		情報なし群 N = 41	1(2.4)	25(60.9)	7(17.1)	4(9.8)	4(9.5)	
	中学生	情報あり群 N = 18	2(11.1)	10(55.5)	3(16.7)	1(5.6)	2(8.1)	
		情報なし群 N = 135	5(3.7)	69(51.1)	40(29.6)	9(6.7)	12(8.1)	
女子	小学校上学年	情報あり群 N = 49	3(6.1)	11(22.4)	16(32.7)	10(20.4)	9(17.0)	
		情報なし群 N = 32	1(3.1)	6(18.8)	9(28.1)	4(12.5)	12(37.5)	
	中学生	情報あり群 N = 79	6(7.6)	14(17.7)	28(35.4)	7(8.9)	24(29.3)	
		情報なし群 N = 247	11(4.5)	49(19.8)	68(27.5)	21(8.5)	98(39.0)	

上学年や中学生にこれらの精通・初経の変化を肯定的に受けとめられるような働きかけを、家庭と学校が協力して行っていく必要がある。

(5) 子どもからの性の質問に対する保護者の対応

子どもから性のことについて質問された時に、保護者がどのような対応をしているかを示したものが図3である。

「子どもが理解できるように話す」ことができるとした保護者は、小学生の母親で81.7%、中学生の母親で81.5%、小学生の父親で72.4%、中学生の父親で69.9%であり、小中学生ともに父親の方がやや少なかった。愛知県教育センター¹³⁾が、1989年に小・中学生の保護者を対象に行った調査結果では、それぞれ61.0%、60.6%であり、親が子どもに性についての話をするのできる家庭の子どもほど、性について明るく、こだわりなく話すことが報告されている。

今回の我々の調査では、子どもに性の話ができる保護者は、小・中学校ともに愛知県の結果に比べて多くなっており、子どもの質問に率直に答えようとしている様子が見えられた。このことから学校が保護者への働きかけをすることにより、家庭で効果的に性の指導ができる土壌はあると思われる。しかし、その一方

で保護者のほとんどが学校で性教育を受けた経験がないという現状や急激に変化する価値観や生活の中の古い意識とのずれに戸惑っていることにも注意を払う必要がある。現在多くの学校で性に関する授業公開をして保護者に参観してもらったり、保護者会や学校保健委員会等で家庭の性の指導に関する内容を取り上げているが、さらに積極的に保護者自身が変容するような働きかけが必要である。これに関して本町では保健所が開催している思春期教室への参加をよびかけるなどの手だてを講じている。

ブロック¹⁴⁾は健康信念モデルに基づいて手引き書を作成し、思春期の子どもへの保護者に対する20時間の教育を行い、その後の家庭の行動変容に関する調査を行った結果を報告している。その結果をみると、啓発を受けた保護者の家庭では、性、エイズ、その他の性感染症に関する親子の対話が増えていることや、セクシュアリティに関係した態度や行動に良好な影響を及ぼしているという示唆に富む提言をしている。学校では主に集団を対象とした指導をしているために個人差の著しい思春期の子どもたちの個々の発達に応じた指導を行うには限界がある。したがって、望ましい行動変容をもたらす指導がされるようになるためには学校と保護者の連携が欠かせないと思われる。

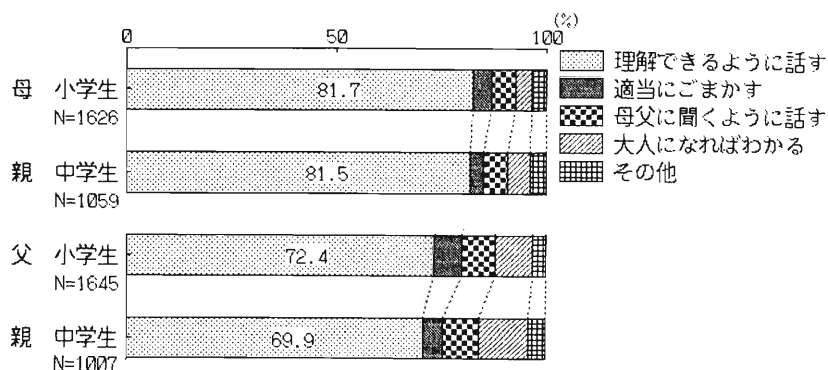


図3 子どもからの性に関する質問への保護者の対応

4 おわりに

家族から自分の誕生について情報を得ている者は、得ていない者に比べて精通・初経や自分の性を肯定的に受けとめる傾向がみられた。したがって、出生にまつわるエピソードをわが子に話すことは大切なことであると思われる。中学生では自分の誕生について「聞いた」と回答している者が小学生に比べ少なくなっていたが、中学生に対しても年齢に応じた方法で繰り返し語り伝えることが望ましいと考える。

本論文に用いた調査結果は三好町保健部会で行った調査の一部である。保健部会の方々に感謝します。

なお、本論文の要旨は第39回日本学校保健学会(1992.11, 名古屋)において発表した。

〔参考文献〕

- 1) 小林 登記, T. ベリー・ブラゼルトン: 親と子のきずな, 医歯薬出版, 序, 1982, P. 8
- 2) 小此木啓吾: 親の心 子の心, 小学館ライブラリー, 1992, P.11
- 3) 斉藤浩子: 子どもを愛せないカップルの精神病理, 235, 現代のエスプリ, 至文堂, 1989, P.152
- 4) 藤田 純訳, デズモンドモリス: マンウオツチング(下), 小学館ライブラリー, 1991, PP.68-69
- 5) 東京都幼稚園・小・中・高等学校性教育研究会: 児童・生徒の性, 学校図書, 1990, P.33
- 6) 武川行男: 五分間性教育のすすめ, ぎょうせい, 1986, P.119
- 7) 水上明子, 飯盛穂波: 青年期における母娘間の愛着と親準備性について, 母性衛生, 33-2, 1992, P.246
- 8) 武川行男: 前掲書6), PP.147-148
- 9) ハツ塚実: 思春期の心を開く力, 朱鷺書房, 1983, P.34
- 10) 松本清一: 月経に関する意識と行動の調査, MSG研究会, 1990, P.60
- 11) 川瀬良美: 初経時の母親の対応の心理的变化, 思春期学 Vol.9, No.4, 1991, PP.381-384
- 12) 平林 進: 性のめざめ, 196, 現代のエスプリ, 至文堂, 1983, PP.54-55
- 13) 愛知県教育センター: 小・中・高等学校における性に関する研究, 愛知県教育センター紀要, 78, 1989, P.33
- 14) Gay C.Brock et al: Using the Health Belief Model to Explain Parents' Participation in Adolescents' At-Home Sexuality Education Activities, Journal of School Health, Vol.65, No.4, 1995, PP.124-128